

木簡と大宝令

岸 俊 男

日本出土の木簡に関する研究は最近ようやく軌道に乗り、多くの成果をあげながら順調に歩みはじめたようであるが、その日本簡の有するいくつかの基礎的な課題のうちにつぎのようなものがある。

まず日本における出土木簡は、目下のところ一方で紙も文字を記すために用いられているいわゆる紙木併用期のものに限られているので、それでは木簡と紙との使い分けをどうしたかという問題である。この問題に対しては、木簡が「木」で作られているという材質上の特徴を考察の基点にすえて、そこから木簡と、紙に書かれた文書・記録などとの機能面における違いを追究して解いて行こうという試みがなされている。その結果、最近木簡が確かに「木」としての特質を生かした使われ方をしていることが次第に明らかになりつつあるが、そうした木簡の独自性は、たとえば木簡を紙に書かれた文書とは全く異なるものとして評価させるに至っていたのであるうか、つまり当時の公私文書全般のなかで木簡はどのような位置を占め、また紙の文書とどのような関係にあったのだろうかというところが一つ問題となってくる。

つぎにいま一つは日本ではいつごろから木簡が使用されはじめたのだろうかという問題である。現在までの出土簡では坂田寺と難波宮出土のものが七世紀半ばを遡るとされるが、年紀の明らかなものでは、飛鳥の伝板蓋宮遺跡外郭外溝から出土した「大花下」などの冠位を記した木簡や「白髪部五十戸」の貢進物付札が、大化五年（六四九）二月から天智三年（六六四）二月までの間のものとみられて最も古い。この問題の解決については今後における古い木簡の出土を期待するより致し方ないのかも知れないが、ただ荏苒として徒らにその日を待つよりは、現在までに得られただけの資料をもとにいろいろの方向からその時期を推定してみることも必要であろう。しかしそうしたとき、この問題は必然的に日本の木簡が中国や朝鮮の木簡といかなる関係にあったかという基本的な課題に突き当たる。

以上掲げたような二つの問題はどれも早急に解決されるような簡単なものではないが、本稿ではそうした課題の究明に対する私的なささやかな努力を試みてみたいと思う。

奈良国立文化財研究所編『藤原宮木簡一』解説に付章として収載されている「藤原宮木簡の記載形式について」は、藤原宮出土木簡の貢進物付札（荷札）の記載形式の特色の一つに関して、次のように述べている。

平城宮出土木簡の場合にはすべて「国名＋郡名＋里名＋個人名＋年月日」という記載の順序を原則にしており、里名や個人名を記さない場合でも、この順序には変化がない。これに対して藤原宮出土木簡の場合には「年月日＋国名＋評名＋里名＋個人名」という形式をもつものが多いことである。平城宮出土木簡にみえる記載順序は『令義解』にみえる養老賦役令調皆随近条に「注国郡里戸主姓名年月日」と規定されていることに準じて記載しているものと思われる。『令集解』の賦役令調皆随近条は古記を引用せず、他にも直接関連する史料はないが、大宝令施行期間中の調庸布の墨書銘や平城宮出土木簡はすべて、この随近条に準じているから大宝令にも随近条の注は存在したものとみて大過ないであろう。そうであるとするれば、藤原宮出土木簡に「年月日＋国名＋評名＋里名＋個人名」という記載が多いのは、大宝令施行以前の制度によるものではないかと推察される。

すなわち、浄御原令制下の貢進物付札においては、年月日を冒頭に記していたが、大宝令の施行とともに記載順序が変わり、逆に年月日が最後にくるようになったというのである。いま最近までに出土した貢進物付札のうち、年月日記載が冒頭にくるものすべてを年代順に掲げると次のようになる。

- (1)・〈壬午年十月□□毛野〉
 ・〈□□□□〉
 （天武二）藤原 史料 545⁽²⁾
- (2) 癸未年七月^{三野大野評阿漏里}
 □□□□^{（阿カ）}
 （天武二）藤原 史料 544
- (3)・〈辛卯年十月尾治國知多評〉
 ・〈入家里神部身□□〉
 （持統五）藤原 史料 166
- (4)「辛卯年十二月新井里人宗我部□×（持統五）伊場 報告 7
- (5)・〈甲午年九月十二日□□國□□〉
 ・〈阿具^{（比カ）}里五^{（百木カ）}□□部□□□□米□□^{（養カ）}（六斗カ）〉
 （持統八）藤原 史料 162
- (6) 〈乙未年木夷^{秦人倭里}〉
 （持統九）藤原 報告 114
- (7) 〈乙未年御調寸松〉
 （持統九）藤原 史料 175
- (8) 「乙未年入野里人君子部□×」
 （持統九）伊場 報告 9
- (9) 「乙未年十月×」
 （持統九）伊場 報告 10
- (10) 「丙申年七月旦波國加佐評□×」
 （持統一〇）藤原 史料 155

- (11) 「丙申□□□□□□□□」× (持統一〇) 藤原 史料 193
- (12) 「丁酉年若狹國小丹生評岡田里三家人三成」
・「御調塩二斗」 (文武) 藤原 史料 147
- (13) 「丁酉年若佐國小丹□□斗」里 (文武) 藤原 史料 182
- (14) 「戊戌年三野国厚見評」
・「□□里秦人□□五斗」 (文武) 藤原 現説
- (15) 「己亥年十月上挾國阿波評松里」× (文武) 藤原 報告 115
- (16) 「己亥年若佐國小丹」×
・「三家里三家首田末□□」× (文武) 藤原 報告 117
- (17) 「己亥年九月三野國各□□」× (美カ) (文武) 藤原 史料 160
- (18) 「汙奴麻里五百木部加西□□」×
・「己亥年十月吉備□□」× (中カ) (文武) 藤原 史料 182
- (19) 「己亥年十二月二方評波多里」
・「大豆五斗中」 (文武) 藤原 現説
- (20) 「庚子年四月若佐國小丹生評」
木ッ里秦人申二斗「 (文武) 藤原 史料 146
- (21) 「庚子年三月十五日川内國□□」× (文武) 藤原 現説

(22) 「大寶三年十一月十二日御野國榆皮十斤」

(大宝 三) 藤原 史料 161

このように貢進物付札に関しては、やはり指摘されたごとく、干支をもつて年紀を記した木簡、つまり大宝以前のものについては、例外なくすべて年月日が最初に書かれており、しかも新しい資料を加えると、最も早いものは天武十一年(六八二)にまで遡る。一般に浄御原令の編纂は天武十年二月から始められ、その施行は持統三年(六八九)六月からとされるので、こうした記載形式は単に浄御原令制下だけに限られるのではなく、すでにそれ以前からのものであることが知られる。これに対して年月日が最後に書かれる記載形式はいつから始まるのかを、やはりその後の出土木簡を含めて改めて年代の古いものから順を追って若干列挙してみよう。

- (23) 「尾治國知多郡」× (大宝 二) 藤原 史料 151
- ・「大寶二年□□」×
- (24) 「下毛野國足利郡波自可里鮎大贊一古参年十月廿二日」 (大宝 三) 藤原 史料 3
- (25) 「尾治國知多郡贊代里」 (大宝 三) 藤原 史料 655
- ・「九部刀良三斗三年九月廿日」
- (26) 「丹國加佐郡白葉里大贊久己利魚腊一斗五升和銅二」 (和銅 二) 藤原 史料 451
- 年四月「 (波カ)

(27) ×□大贄十五斤和銅二年四月く (和銅 二) 藤原 現説

「参河國□臣郡寸□里海部宇麻呂□□ (鮑カ) (春關カ)

(28) 米五斗 和銅二年十二月无位主帳□□麻呂く (和銅 二) 平城 史料 2704

(29) 「上総國猪腊二斗 (和銅 二) 平城 概報三

「銅二年□月□日 (和カ) (十一カ) (一カ)

(30) 「越中國利波郡川上里鮒雜 (和銅 三) 平城 概報六

「腊一斗五升 和銅三年正月十四日」

(31) 「三野國本須郡□□□□□□ (和銅 四) 平城 概報三

「和銅四年□二月 (十カ)

以後はほとんどすべて同様であるので省略するが、最近の出土例を加えても、さきに指摘されたとおり、年月日を最後に記す貢進物付札は大宝二年を遡らない。したがって貢進物付札の年月日記載形式が大宝令の施行された大宝二―三年を境にして記事の冒頭から末尾へと変化したとする『藤原宮木簡一』解説の提言は正しいとすべきであろう。しかしそうした変化がたとえ大宝令にも存在したと推定される賦役令調皆随近条の「凡調皆随近合成、絹繩布両頭、及糸

綿囊、具注三國郡里戸主姓名年月日、各以三國印一タレ之、」という条文によったものであるにせよ、年紀を冒頭に記す記載形式が浄御原令以前に遡ることが明らかになった現在の段階では、単に賦役令の規定の問題に止めておくことはできないと思う。そこで私はこの貢進物付札にみられる記載形式の変化の問題を他の文書簡や記録簡にも及ぼして検討を加えてみたいと思う。

二

そこでまずいままでに出土した文書簡・記録簡のうち、年月日の記されているものを年代の古いものから順を追って掲げてみよう。

(32) 「辛酉年三月十日□×

(齊明 七) 藤原 報告 86

「百代主支 百代□×

(33) 「(辛巳カ)(正カ) 年□月生十日柴江五十戸人 若□

「□□三百卅束□□マ□□ (若倭カ)

(天武一〇) 伊場 報告 3

(34) 「甲申年七月三日 (部カ)

「日仕甘於連×

(天武二三) 藤原 史料 522

(35) 「己丑年八月放×

「二万千三百廿×

(持統 三) 伊場 報告 4

- (36)・「乙未年八月十一日 舍人□□□□^(秦内麻カ)」
 ・「□□□□」
 (持統 九) 藤原 史料 39
- (37)「丙申年十月□□^(十カ)」
 (持統一〇) 藤原 史料 631
- (38)・「己亥年□□月十九日 潤評竹田里人若倭マ□□末呂上為^(老カ)」
 ・「持物者馬□□□□人□□史□□評史川前連□□^(五カ)」
 (文武 三) 伊場 報告 108
- (39)×□□□□太寶貳年拾壹月^(諸カ)」
 (大宝 二) 藤原 県概 8
- (40)・「皇太妃宮職解卿等給布廿端□□^{(慶雲 三) 藤原 現説}」
 ・「慶雲元年□□□□^(年カ)」
 (慶雲 三) 藤原 現説
- (41)・「皇太妃宮職解^(枚カ)」
 ・「□□□□□□□□□□^(年カ)」
 (年次未詳) 藤原 概報 5
- (42)×□□□□七^(枚カ) 慶雲三年三月一日
 (慶雲 三) 藤原 史料 999
- (43)□行調度□□□□肆尺
 和銅元年九月×
 (和銅 元) 藤原 報告 131
- (44)・「□□^(多運カ)」
 ・「□□^(比日名)」
 ・「□□^(掃守カ)」
 ・「□□銅元年二月七日^(和カ)」
 (和銅 元) 藤原 概報 5

- (45)・「□□□□^(宮カ)從七位上桑原□□^(登カ)」
 ・「□□□□和銅三^(年カ)」
 (和銅 三) 藤原 報告 5

右にはさきの貢進物付札の場合と同じく和銅三年ごろまでを限って掲げ、以下を省略したが、これらの年紀の明らかな文書簡・記録簡を通観すると、そこでも大宝令の施行された大宝二年ごろを境として、その前後において貢進物付札の年月日記載にみられたと同じ変化、つまり年紀が文章の最初から最後に移るといふ変化が起こっている。もっとも(32)や(35)のような字配りで下部が欠損している場合には、厳密には必ずしも年紀のある面が表とはいきれず、裏とする方が表で、年紀は文章の途中にあるものといえるかもしれない⁽⁴⁾。とくに記録簡の場合はその判定が難しいが、文書簡ではそのように文章の途中の年紀が偶然にちょうど裏面の冒頭にくるといふようなことはまずないと考えられるので、一応年紀の書かれている方を表と判定した。また(41)については年次未詳としたが、同じ皇太妃宮職解である(40)や、「皇太妃宮職解」という用字、およびここにいう皇太妃が皇太子草壁親王の妃で、のちに元明天皇として即位した阿閑皇女をさすことなどを勘案すれば、大宝―慶雲年間のものとして推定してまず間違いあるまい。

以上のように文書簡や記録簡においても、大宝令の施行を契機として年月日の記載形式に変化が起きているとすると、つぎの事例

のように年次が明記されず、単に月日だけが記されている場合についても検討の資料とすることができ。

(46) 「九月廿六日蘭職進大豆卅」×

藤原 史料1

(47) ×於市^(沽カ)遣糸九十斤雙王 猪使門 。

藤原 史料2

・×月三日大属従八位上津史岡万呂。

すなわち(46)には「蘭職」がみえるが、これは他の藤原宮木簡にみえる膳職・塞職と同様に浄御原令における官司名で、大宝令では園池司となる。したがってこの木簡が大宝令施行期より以前のものであることは確実である。これに対して(47)には「従八位上」という大宝令以後の位階が記されており、また「大属」という官名は大宝令における寮の主典であるから、大宝令施行期以後のものであることは明らかである。ところが(48)においては「九月廿六日」という日付が冒頭に記されており、(47)では「□月三日」の日付は公式令の書式のごとく差出人とみられる官人の位署の前に記されている。ただ(47)の場合も、それだけでは表裏の判定が恣意的と評されるかも知れないが、図版写真による限り、字配りや字の大きさ、筆勢、および木簡の作り方、下端の穴のあけ方などから総合的に判断して、まず誤りないものと考え。そうすると、年次の記されていないこの二点についても、大宝令以前と以後で年月日の記載形式の変化していることが確認できるのである。

藤原宮出土木簡には年次不明のもので、単に月日のみを記すものが他にもある。それらには月日が冒頭にあるものも、また後に記されているものもあり、上下が折損されている断簡の場合はいずれとも判別し難いものも多い。しかし藤原宮の存続期間は大宝令施行の前と後にわたっており、両様の書式のもの混在しているのは当然であって、上述のような推論の支障にはならない。それでは平城宮の場合はどうであろうか。平城宮というまでもなく大宝令、およびそれをほぼそのまま継承した養老令の体制下にあったが、やはり文書簡を検しても年月日を冒頭に記すものはほとんどなく、大宝令以後の藤原宮の場合と同じく、文章の最後か、使者名や差出人などのあるときはその前に記すのが原則であったことが明らかに知られる。いまそのすべてをここに掲げることにはできないので、代表的なものを少し例示しておこう。

「津嶋連生石

春日掠人生村宇太郡

(48) 召急山部宿祢東人平群郡

三宅連足嶋山邊郡

忍海連宮立忍海郡

大豆造今志廣背郡

「刑部造見人

和銅六年五月十日使葦屋

・小長谷連赤麻呂 右九

掠人大田 充食馬

小長谷連荒當

(和銅 六) 平城 概報六

- (49)・「北□所進 舉鎡十六隻長三寸半 牒□六隻長四寸」
 「尻塞卅四枚 鎡二隻」
- ・「位并尻塞四枚 本受鐵卅三斤十兩 損十一斤十兩
 合卅二斤 了」 神龜六年三月十三日足嶋
- (50)・「進上瓦三百七十枚 女瓦百六十枚 鎡瓦七十二枚
 十六人各十枚 廿三人各六枚」 宇瓦百卅八枚 功卅七人
- ・「付葦屋石敷 神龜六年四月十日穴太□
 主典下道朝臣向司家」
- (51)・「嶋掃進兵士四人依人役數欠」 (神龜 六) 平城 概報二
- ・「狀注以移 天平十一年正月二日」 (天平一) 平城 概報八
- (52)・「府召 牟儀猪養 右可問給依事在召宜知」 (翼 大志 少志 四月七日付縣若虫)
- ・「狀不過日時參向府庭若遲緩科必罪」 (年次未詳) 平城 史料54
- (53)・「務所牒 作門所 厩五人匠丁四 右充彼所」 (年次未詳) 平城 概報五
- ・「少録船連鈴末呂 八月廿八日付委文末呂」 (年次未詳) 平城 概報五
- (54)・「東三門 額田 林 神 北門 日下部 北府 服 北府 大伴」
 「合十人 漆部 秦 五月九日食司日下部太万呂狀」 (年次未詳) 平城 史料100

- (55)・「坤宮官縫殿出米參斗 右薪買」
- ・「遣如件 五月廿八日舍人池後小東人」 (年次未詳) 平城 概報九
- (56)・「(北カ) 倉橋部人足 小月隼人 内藏乙万呂
 □厨坊宿人久米一万呂 因幡田作 鴨諸第□
 宮門本在 山田廣足 □福□万呂」
- ・「合九人 十月七日倉橋部人足」 (年次未詳) 平城 概報二
- しかし中には例外的に年月日が冒頭にある事例もなくなはないが、極めて少数であり、そうしたものがあっても遺例と考えれば行論には差支えない。参考までに若干の例をあげてみよう。
- (57)・「八月廿八日進紺糸二斤六兩一分□□ 附葉×
 ・「正六位上行正勲十二等山口伊美吉 天平十三年×
 (天平一三) 平城 史料57
- (58)・「四月十四日記若□進米二升」 (年次未詳) 平城 概報三
- ・「
 □」
- (59)・「和銅三年四月十日阿刀」 (和銅 三) 平城 概報三
- ・「マ志祁太女春米」
- 「八月十九日請古御酒□升又廿□請□□三升又廿二日古御酒
 三升請又廿四日古御酒三升□又廿五日古御酒三升請又廿□
 (御酒三升請) 九月□日古御酒二升」

61・「十二月十七日辰時奉入人□□人」

・「持鉏四柄」

(年次未詳) 平城 概報六

61は月日が冒頭に記されているが、年次が改めて末尾にやや小さい字で記入されている。このような物品の進上に関する木簡には月日を最初に記したものが多く、62も63もその一例で、64は上端に切込みがあり、むしろ貢進物付札の例外とすべきものかも知れないが、65や「竹野王子大許進米三升受稲□」「六日百嶋」(平城・概報一三)という木簡とともに出土しているので、一括してここに掲げた。そのほか削片や断簡であるが、「十三日進鮪□」「九日進□□□」(ともに平城・概報一一)というものもある。66は記録簡というべきもので、請求した酒の量を順次日ごとに連記したものであるから、まず月日が最初に記されるのは当然であろう。61は月日だけでなく時刻が記されており、門の出入のためのものであるから、とくに日付を強調する意味ではじめに記されたのであろう。なおこの木簡は64をはじめ和銅六―八年の木簡とともに出土しているので、平城宮でも比較的早い時期のものであるが、同様な例は藤原宮でも「×月十一日戌時奉×」(藤原・史料24)「□月□日申時□□」「秦連若麻呂奉□」(藤原・概報五)などが出土している。

平城宮出土の文書簡・記録簡についての検討はひとまず終わるこ

ととして、他の遺跡出土の文書簡で年月日を冒頭に記した問題となるような木簡についてみてみよう。

62 「八月□日記貸稲数財マ人 物× (年次未詳) 大宰府概報4

63 「十月廿日竺志前贊驛□□留多比二生鮑六十具 鯖四列都備五十具」

・「須志毛十古 割軍布一古」

(年次未詳) 大宰府概報7

64 「嘉祥二年正月十日下午稻日記 □年料」

・「□三千八百卅四□『勘了 正月十□』」

(嘉祥 二) 弘田 概要

62と63はともに大宰府遺跡から出土したもので、62は蔵司西地区から「久須評」や「里長日下部君牛宰」という字句のみえる木簡とともに出土しているが、この木簡の冒頭の「八月廿日記」のように、文章の最初に年月日を記して「―記」と書く形式は、最近の稲荷山古墳出土鉄剣銘にもみられ、そのほか法隆寺献納菩薩半跏像銘に「歳次丙寅年正月生十八日記」(推古一四、六〇六)、同観音菩薩立像銘に「辛亥年七月十日記」(白雉二、六五二)、野中寺弥勒菩薩半跏像銘に「丙寅年四月大旧八日癸卯開記」(天智五、六六六)、上野山上碑銘に「辛巳歳集月三日記」(天武一〇、六八一)とあり、河内新堂廃寺出土瓦範書にも「□二月記焼終」と刻まれている。しかしそう

題となつてくるのが、やはり『藤原宮木簡一』の解説付章において藤原宮出土の上申文書と認められる文書簡には「宛先の前に申（白）す」という書式が多く、それが大宝令や養老令の公式令に規定された「解式」に先行する古様の上申文書の形式らしいと述べられている指摘である。いま理解に便利のように、煩をいとわずその後の出土例も加えて改めて列挙してみよう。

(年次未詳) 藤原 史料 525

(年次未詳) 藤原 史料 414

(年次未詳) 藤原 史料 466

(年次未詳) 藤原 県概 31

(年次未詳) 藤原 史料 9

(年次未詳) 藤原 史料 11

(年次未詳) 藤原 史料 10

史料 10

73 「御前申薪二束受給」

(年次未詳) 藤原 景概

73・「卿等前恐々謹解」(龍カ) □□□×

(年次未詳) 藤原 史料 8

・「卿尔受給請欲止申

74・「御宮若子御前恐々謹×

(年次未詳) 藤原 史料 613

・「末□□(豊カ)命坐而自知何故×

75 「彈正臺笠吉麻呂請根大夫前桃子一二升
奉直丁刀良

(年次未詳) 藤原 報告 77

これらの木簡にはいずれも年月日が記されておらず、またそのことが一つの特色として問題となるが、そのためにこれらすべてを直ちに大宝令施行以前のものと断定することはできない。ただ最後に掲げた75には「彈正臺」とあり、『続日本紀』天平十四年十一月癸卯条の大野朝臣東人の薨伝に「飛鳥朝糺・職大夫直広肆果安之子也」とあることからすれば、この木簡は大宝令施行以後の確率が高いが、「宛先の前に請ふ」という表現は他の「宛先の前に申す」とはやや異なり、「請」という用字も76の「被賜」、77の「受賜」、78の「受給」と比較して新しさを感じさせ、平城宮における物品請求の木簡でもほとんどこの「請」の字が用いられているから、そうした記載形式への過渡的な事例と見做すべきであろう。74は下部が欠損しているため、「謹」のつぎの字が不明であるが、73と比較し、またのちの用例を勘案すると、73と同じく「謹解」とあったものであ

ろう。「解」という用字もつぎに述べる公式令の「解式」にみえるように、大宝令以後の上申文書ではつねに用いられる言葉であるが、76から78までの文書簡では「白(啓)」「申」がもっぱら用いられていて、ここにも相異が認められる。平城宮朱雀門付近の下ッ道側溝から出土した過所木簡としてよく知られている

79・「関々司前解近江國蒲生郡阿伎里人大初上阿伎勝足石」

|| 許田作人 ||

・「同伊刀古麻呂大宅女右二人左京小治町大初上笠阿曾弥安戸人
送行乎我都 鹿毛牡馬歳七 里長尾治都留伎

|| 右二 ||

(年次未詳) 平城 史料 1926

は藤原宮当時のものとみられているが、記されている位階からすれば大宝と和銅年間のものといえよう。そしてこの木簡が「宛先(関々司)の前に解す」という表現をとっていることは、時期的にみてやはり大宝令以前の書式から大宝令以後の公式令書式に移る過渡的な表記法をとるものと解され、興味深い。

このように藤原宮出土の文書簡には、上申文書としての大宝公式令に規定された「解式」とは異なる古様を示す書式が用いられているものの存することが知られたのであるが、一方では大宝公式令の「解式」に則ったとみられる文書簡が多数出土している事実と照合するとき、そのことの有する意義はいっそう明瞭となろう。そうした「解式」によっているらしい木簡はとくに最近行なわれた発掘調査によって藤原宮東面北門(山部門か)付近の外濠から多く出土し

たことが報告されている。さきに掲げた皇太妃宮職解の木簡二点(41)(42)もそうであるが、なお若干の事例を追加しておこう。

77・「造兵司解」
 (麻カ) (部カ)
 □□□□□□
 ×

・「六」
 (寸五分カ)
 □□□□□□
 ×

78・「内膳司解供御」
 □□□□□□
 ×

・「御料塩三斗」
 □□□□□□
 ×

79・「織部司解」
 □□□□□□
 ×

これらはいずれも年月日の記載がないが、「造兵司」「内膳司」「織部司」という官司名からすれば、大宝令施行以後のものであることは明らかであり、その書式は公式令の「解式」に近く、それに依っているとみてよからう。ただ以上のような考察から、「解」という文字や、それを用いた上申文書の木簡が大宝令施行以前には存在しなかった、つまり「解」を用いた文書簡が出現するのは大宝令施行以後であったと速断するのは慎まねばならない。それはなお関係木簡の出土例が少ないからでもあるが、たとえばつぎのような木簡も存するからである。

80・膳職白主菓餅申解解
 (年次未詳) 藤原 報告21

この木簡は両端とも切断されているらしいが、「膳職」の上に若干余白があり、「大膳職」とは読めないようなので、やはり大膳職・内膳司に分化する大宝令以前の膳職であろう。主菓餅は大宝令で

は大膳職に属する伴部で、浄御原令下でもこうした名称や用字の官人が存したか否かに疑点が残るが、「白」などの用字からすると、前述するところからもこの木簡を大宝令施行以前のものとみるに矛盾しない。ところがそこには習書らしい文字で「申解解」の三字が記されている。習書であり、なお慎重に判読する必要があるが、もし膳職に照応するものならば、大宝令施行以前における「解」の用字を示す一例となる。

こうした細部の点でなお検討を要する問題はあるが、藤原宮木簡を大観するとき、大宝令施行の前と後で上申文書の文書簡においてもその書式に变化があり、施行後は原則として大宝公式令の「解式」の書式に則っているらしいといえるであろう。そのほか公式令の「符式」「移式」と同じとみられるものに「符処々塞職」(藤原・史料12)や「中務省移」(藤原・現説資料)がある。出土数は極めて少ないが、その点は平城宮においても同様であり、一般的に紙の文書でも符や移の遺存する例は稀れである。それはともかくとして、前者については「塞職」=関司という用字に必ずしも大宝令以後とできない疑問が残るが、後者は明らかに大宝令以後であり、また「官奴司謹奏」(藤原・概報四)のごとく「奏」の用語も大宝令以後の木簡にみえる。

このように考えると、大宝令施行後の貢進物付札の年月日記載の位置の変化が大宝賦役令の規定に従っていると推定されたと同じよ

うに、文書木簡における同様な変化はやはり大宝公式令によっているのではなからうかと推測されてくる。そしてさらに貢進物付札の書式の変化も起因するところはむしろそこにあるといえるのでなからうか。そこでもしこの推測が当たっているならば、少なくとも藤原宮当時においては木簡は公式文書の書式変化に即応していたのであるから、第一に問題とした点に関しては、木簡は紙の文書に劣らぬ役割を果たし、また同等の評価を受けていたといえるのでなからうか。

ところで藤原宮出土の木簡に大宝初年を画期として大宝公式令の文書形式の影響が顕著に現われており、とくにそれは年月日記載の変化が重要な指標となっているとすると、それは木簡だけに限られる現象であらうか。そのことを検討するために、伝存する奈良時代以前のすべての金石文について、その年月日記載の位置を整理して示したものが次表である。

四

銘文年紀と位置	出 掘	年次	西 暦	備 考
1 A 辛亥年七月中記	稻荷山古墳金象嵌鉄剣	雄略	四七一	一説五〇三年 雄略否定説あり
2 A' 治天下獲□□□□大王世	船山古墳銀象嵌大刀	仁賢	五〇三	一説四四三年
3 A 癸未年八月十日	隅田八幡神社人物画像鏡	推古	五九四	一説六五四年、朝鮮製説あり
4 A 甲寅年三月廿六日	法隆寺献納光背(東博)	二	五九四	現存せず
5 A 法興六年十月在丙辰	伊豫温湯碑(和歌山)	四	五九六	現存せず
6 A 歲次乙丑四月八日戊辰	元興寺丈六像(元興寺縁起)	一三	六〇五	一説六六六年
7 A 歲次丙寅年正月生十八日記	法隆寺献納菩薩半跏像	一四	六〇六	
8 C 池辺大宮治天下天皇大御身旁賜時歲次丙午年 歲次丁卯年仕奉	法隆寺金堂薬師像	一五	六〇七	追刻説あり
9 B 法興元卅一年歲次辛巳十二月鬼前太后崩、明年正月廿二 日上宮法皇枕病 尊像并侍侍	法隆寺金堂釈迦三尊像	三一	六二三	
10 A 戊子年十二月十五日	法隆寺釈迦如来・脇侍像	三六	六二八	
11 B 大化二年丙午之歲構立此橋	宇治橋碑	大化二	六四六	断片、他の部分は復原

31	B 城、時年卅六、粵以其年冬十一月乙未朔廿一日乙卯掃葬	威奈大村墓誌	〃	四	七〇七	
30	C 慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒 以慶雲四年歲在丁未四月廿四日寢疾終於越	文彌麻呂墓誌	〃	四	七〇七	
29	至干戊戌年 丙午年三月露盤營作	法起寺塔露盤	慶雲	三	七〇六	
28	A 壬歲次撰提格林鐘拾伍日 C' 上宮太子聖德皇壬午年二月廿二日臨崩之時	豐前長谷寺觀音菩薩像	大宝	二	七〇二	
27	B 維清原宮馭宇天皇即位八年庚辰之歲建子之月 大上天皇奉遵前緒、遂成斯業	藥師寺東塔擦	〃			
26	B 永昌元年己丑四月 辰節珍、故意斯麻呂等立碑	下野那須國造碑	〃	四	七〇〇	
25	A 戊戌年四月十三日壬寅収 歲次庚子年正月二壬子日	妙心寺鐘	〃	二	六九八	現存せず
24	A 丁酉年十二月作	豐前安心院積迦像(石清水文書)	文武	元	六九七	
23	A 甲午年三月十八日	法隆寺造像記銅板	〃	八	六九四	
22	A 壬辰年五月	采女竹良瑩域碑	〃	六	六九二	
21	C 奉爲淨御原大宮治天下天皇敬造 己丑年十二月廿五日	鰐淵寺觀音菩薩像	持統	三	六八九	現存せず、拓本のみ
20	C' 歲次降婁漆菟上旬道明率引捌拾許人	長谷寺法華說相圖	朱鳥	二	六八六	一説文武二年(六九八)・和銅三年(七一〇)など
19	A 辛巳歲集月三日記	上野山上碑	〃	一〇	六八一	
18	C 營造歲次丁丑年十二月上旬即葬	小野毛人墓誌	〃	六	六七七	一説追刻
17	A 丁丑年三月十日 直針間古願幡	法隆寺幡(良訓法隆寺記補忘集)	天武	六	六七七	一説六一七年、現存せず
16	B 庚寅、故戊辰年十二月殯葬	船王後墓誌	〃	七	六六八	
15	A 丙寅年四月大旧八日癸卯開記 殞亡於阿須迦天皇之末歲次辛丑十二月三日	野中寺弥勒半跏像	天智	五	六六六	
14	B 二菩薩 宝元五年己未正月〇〇〇識敬造弥陀仏像并	西琳寺阿弥陀仏像(西琳寺縁起)	〃	五	六五九	現存せず
13	A 戊午年十二月 (一種智)	觀心寺觀音菩薩像(根津美術館)	齊明	四	六五八	
12	A 辛亥年七月十日記	法隆寺獻納觀音菩薩像(東博)	白雉	二	六五一	

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32
C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C
真成	三年庚戌冬十月火葬 十三日己未	和銅元年歲次戊申十一月廿七日己酉成	和銅元年歲次戊申秋七月一日卒也、 和銅三年十一月	和銅四年三月九日甲寅宣（ 和銅七年歲次甲寅二月廿六日命過 和銅八年四月敬以進上於三重宝塔七科鐘盤 矣	養老五年歲次辛酉冬十二月癸酉朔十三日乙酉葬	以癸亥年七月六日卒之、養老七年十二月十五日乙巳	養老七年歲次癸亥年立	神龜三年丙寅二月廿九日	神龜四年歲次丁卯十二月十一日鐫奉主德因時	戊辰十一月廿五日□□逝去 壬戌六月十四日□□逝	神龜六年歲次己巳二月九日	神龜六年七月六日	神龜五年歲次戊辰十月廿日卒 天平二年歲次庚午十月廿日	天平十一年八月十二日記歲次己卯	天平廿一年歲次己丑三月廿三日沙門
行基骨藏器	楊貴氏墓誌	美努岡万墓誌	正倉院漆柄香爐箱	小治田安万侶墓誌	山代真作墓誌	興福寺觀禪堂鐘	上野高田里結知識碑	阿波国造碑	太安万侶墓誌	元明天皇陵碑	栗原寺塔露盤	道藥墓誌	上野建多胡郡碑	伊福部德足比壳骨藏器	下道園勝・園依母夫人骨藏器
〃	〃	天平	〃	〃	〃	〃	神龜	〃	〃	養老	〃	〃	〃	〃	和銅
二一	一一	二	六	六	五	四	三七	三七	三七	五	八	七	四	三	元
七四〇	七三九	七三〇	七二九	七二九	七二八	七二七	七二六	七二三	七二三	七二一	七一五	七一四	七一	七一〇	七〇八
断片、銘文は大僧正舍利瓶記による	現存せず、拓本のみ、擬刻説あり		副板二面も同じ		壬戌は養老六年（七二二）		年紀は左側面								

この表でAはその銘文の成立時点を示すとみられる年紀が文章の冒頭にあると認められるもの、Cは反対にそれが文章の末尾に記されていると認められるもの、Bはそのいずれでもなく、年紀が文章の途中にあるものを示し、ダッシュを付したものはそれぞれの変形と考えられるものである。個々の挙例についていちいち説明を加える余裕はないが、この表を通観してつぎの点が注目される。B型は

当面の問題に直接関係ないと思われるので一応除外するとして、A型・C型についてみると、まずA型は七世紀末までは頻出するが、大宝二年(七〇二)の28豊前長谷寺観音菩薩像銘を最後として、それ以後は皆無である。これに対してC型はA型が消滅する八世紀初頭以後から頻出し、若干のB型を含みはするが、のちにはほとんどすべてC型となる。つまりここでもさきに木簡を検討してえられた結

58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48
C	C	C	C	C'	B	C	B	B	C	C'
日壬午葬	神護景雲四年九月十一日	雲二年十二月	天平神護三年二月四日	八田郷長矢田部益足之買地券文	以天平宝字七年々次癸卯十月十六日 十有五薨于京宅、以十二月乙巳朔壬申葬	宝字六年歲次壬寅 天平宝字六年十二月一日 天平宝字六年歲次壬寅九月丙子朔乙巳春秋七十有五薨于京宅、以十二月乙巳朔壬申葬	從天平勝宝五年歲次癸巳七月十五日盡廿七日 并一十三箇日作□	去天平十三年歲次辛巳春二月十四日朕発願稱 今以天平勝宝五年正月十五日莊嚴已畢	天平勝宝四年四月九日	天平勝宝三年歲次辛卯四月廿四日庚子、從二位竹野王
高屋枚人墓誌	越前劍御子寺鐘	宇治宿禰墓誌	正倉院銀壺	矢田部益足買地券	石川年足墓誌	多賀城碑	藥師寺仏足石	聖武天皇勅書銅板	正倉院雲花形裁文	竹野王石塔
宝亀	景雲	神護	天平	〃	〃	天平	〃	〃	〃	天平
七	四	二	三	七	六	六	五	五	四	三
七七六	七七〇	七六八	七六七	七六三	七六二	七六二	七五三	七五三	七五二	七五一
裏面の天平勝宝元年封戸施入勅書はC'形式										
断片、一説慶雲二年(七〇五)										

果と同じように、八世紀初頭の大宝初年を画期として文章における年記記載が冒頭から末尾へと逆転しているのである。ただし、この表にみられる限り、大宝以前にもC型が存在する。まず8法隆寺金堂薬師如来像の光背に刻まれている造像記であるが、この銘文を推古十五年(六〇七)のものとするについては多くの反対説が提起されている。⁽⁸⁾ いまそれらについて詳論することは避けるが、それらの反対説によれば天武朝以後、和銅あるいは天平以前の追刻と推定されている。つぎは18小野朝臣毛人の墓誌で、銘文中の「丁丑」は天武六年(六七七)に比定されている。しかしこの銘文についてもそこにみえる「飛鳥浄御原天皇」や「大錦上」「朝臣」の語句が天武六年当時のものにそぐわないとして、持統朝から和銅七年にかけての間に於ける子の毛野による追刻追納であろうとする説が有力である。また20長谷寺法華説相図(千仏多宝塔銅板)についてもその制作年代は必ずしも諸説一定していない。銘文中の制作年次を示す「歳次降婁漆菟上旬」は単に「戊の年の七月上旬」というだけのことで、「戊」の比定によっては時代は降りうる。「飛鳥清御原宮治天下天皇」は天武天皇とみるべきであろうから、朱鳥二年説はむしろ難点があり、『三代実録』貞観十八年五月二十八日条に引く律師長朗牒には、「大和国長谷山寺、是長朗先祖川原寺修行法師道明、宝龟年中、率其同類、奉為国家所建立也」と記されているので、宝龟元年(七七〇)戊の年に天武系最後の称徳天皇の病氣平癒を祈願し

たもので、長谷寺の文献上の初見がその二年前の『続日本紀』神護景雲二年十月二十日条の「幸長谷寺捨田八町二」であることにもよく照応するとして、そこまで制作年代を下げる説さえある。⁽⁹⁾ 様式的には白鳳期のものとしても、十二支一運をくり下げて文武二年(六八六)とすることはもちろん、大宝以後とみることもできる可能性も存する。つぎにいま一例は21采女竹良塋域碑である。これは大阪府南河内郡太子町春日から出土したと伝えるが、現物はなく拓本が存するのみである。碑文は「飛鳥浄原大朝庭大弁官直大式采女竹良卿所請造墓所形浦山地四千代他人莫上毀木犯穢傍地也、己丑年十二月廿五日」というもので、年月日は改行して最後に記されている。采女竹良の名は『日本書紀』天武紀に竹羅・筑羅として数回みえ、最後は朱鳥元年九月甲子条の天武殯宮の記事に直大肆で内命婦の事を誅したことがみえる。「大弁官」の官名も同じく天武紀にみえ、「代」の用語も矛盾しない。したがって碑文そのものに疑わしい点はないようであるが、この種の碑文は他になく、また現在知られる拓本も転刻されたものに依ったようなので、なお慎重に検討を要するが、ともかくここでは例外的な存在であるとして注目しておく。

このようにして大宝以前のC型には比定年次に疑点のあるものが多く、金石文においても大宝令施行の前と後において年記記載の様式が変化した可能性が強く、たとえ21のごときものが稀に存在したとしても、C型の先行的なものと解すれば、支障とはならないで

あろう。ただこの表から知られるように、A型を示す大宝以前の事例は造像記に多く、それと比較すべき大宝以後の造像記の例が遺憾ながら存在しないし、逆にC型の事例には墓誌が多く、墓誌の書式は造像記とはやや異なる上に、大宝以前にA型を示す墓誌の例がないという難点はある。しかし大局的にみて、大宝を境として年紀記載がA型からC型に移行する趨勢にあったことは認めてよいと考えられる。したがってここにも木簡と同じような大宝公式令の書式の影響が認められるのでないかと思うが、肝心の紙に書かれた文書について大宝令施行以前はどのようなことを示す資料が残念ながら存在しない。紙に書かれた公文書としては『正倉院文書』として残る大宝二年戸籍が最古のものであるが、たとえば美濃国戸籍では巻首に「太寶貳年十一月御野国山方郡戸籍」とあり、巻尾には「太寶二年十一月 目追正八位下五百井造豊国」とあって、以下国司・郡司が連署していて、一応公式令の書式、つまりC型に近い。また同じ大宝二年の西海道戸籍も巻首は「筑前国嶋郡戸籍川辺里 大寶二年」で始まり、養老五年下総国戸籍も巻首には「下総国葛飾郡大嶋郷戸籍 養老五年」とあるが、ともに巻尾を遺存するものがないので、巻末の書式は明らかでない。しかしこれらの戸籍の書式は、他の正税帳などの公文がたとえば「志摩国司解 申神亀六年輪庸事」とか「紀伊国司解 申天平二年收納大税并神税事」というような文言で始まり、「以前、收納大税穀額并神戸租等数、具録如前、謹解」

と結んで、年月日・位署を記するという完全に公式令の「解式」の書式をとっているのとは異なる。あるいはそこに大宝令以前の公文書書式のかすかな遺制が認められるのかも知れない。とすれば、戸籍として当然のこととはいえ、年紀が冒頭にあるのは注目される。それからこれは公文書ではないが、同じように紙に書かれた大宝令以前の事例としては、經典跋語のうちに一点、朱鳥元年(六八六)のものとしてされる小川陸之助氏蔵「金剛場陀羅尼經」巻一のものがあ

(81) 歳次丙戌年五月、川内國志貴評内知識、為七世父母及一切衆生、敬造金剛場陀羅尼經一部、藉此善因、往生淨土、終成正覺、教化僧宝林

これを和銅年間書写の根津美術館所蔵の「舍利弗阿毘曇論」巻十二や「大般若波羅密多經」巻二十三のつぎのような跋語と対比すると、

(82) 奉為 聖朝、恒延福寿、敬寫一切經論及律、莊嚴既了、和銅三年戊五月十日 沙門知法

(83) 藤原宮御禹 天皇、以慶雲四年六月十五日登遐、三光慘然、四海遏密、長屋殿下地極天倫、情深福報、乃為 天皇、敬寫大般若經六百卷、用盡酸割之誠焉 和銅五年歲次壬子十一月十五日庚辰竟

そこには年紀記載の変化が明らかに認められる。しかしこの場合も、大宝以前の遺例はわずか一例であり、これに対して大宝以後の經典跋語には年紀の冒頭にあるものが割合に多いので、絶対的な実証資料になるとはいえない。

しかし繰り返し述べるように、年紀を冒頭に記す書式が単に木簡だけでなく、金石文や、紙の文書においても、末尾に記す書式に先行するものであることは確かであり、少なくとも木簡ではその変化が大宝令施行を画期として起こっているといえよう。しからばそうしたA型の書式は日本独自のもののなかであろうか、またA型からC型への変化は何によるのであろうか。以下この問題を論じてみたい。

五

新羅の古都、慶州月城の近くにある雁鴨池の先年の発掘調査において、約五〇点の木簡が臨海殿に面する護岸石築の下^(辛亥カ)の泥土層から出土した。それらの中には「庚子年」「甲辰年」「乙巳年」「□□年」「甲寅年」など干支で年を表わしたものが五点、「天寶十載」「寶應四年」など中国の唐の年号を用いたものが二点あり、他に月日のみを記したものが四点ほどある。しかしそれらの年月日を記した木簡を検すると、表だけのものは勿論、表裏に記載のわっているもの

も、すべて年月日は木簡の上端から書かれており、これらの木簡の記載形式は年月日を文章の冒頭に記す日本簡のA型に属することが知られる。

ところでこれらの木簡の年代であるが、その中にみえる「天寶十載」は唐の玄宗の治世で七五一年に当たり、新羅では景德王の十年（天平勝宝三）である。また「寶應四年」の宝應は唐の代宗の年号であるが、四年に当たる七六五年にはすでに改元されていて、広徳三年または永泰元年とすべきであるが、新羅では改元の事実を知らなかったのか、そのまま宝應の年号を用いており、これは景德王の二十四年か、代った惠恭王の元年（天平神護元）に当たる。こうしたことから他の木簡もほぼ同時期のものとみて、干支をもって記された年紀のうち、「庚子年」は七六〇年（天平宝字四）、「甲辰年」は七六四年（天平宝字八）、「乙巳年」は七六五年（天平神護元）、「甲寅年」は七七四年（宝龜五）に当てるのが妥当とし、景德王から惠恭王の代にかけてのもので、『三国史記』新羅本紀景德王十九年（七六〇）二月条に「宮中穿大池」とある雁鴨池の重修工事に関係するのではないかとみられている。もしこの年代比定に誤りないとするならば、すでに日本では年紀記載の書式がA型からC型に移行していた時期に、新羅の木簡ではもっぱらA型が用いられていたということになる。それではそうした現象は単に木簡だけのものではあろうか。日本の場合と同じように、朝鮮三国の他の金石文の事例について検討してみ

よう。

そこでいま試みに黄寿永氏の編著になる『韓国金石遺文』によって、その中からまずA型のものを年代順に抽出してみよう。なおそれぞれの年代比定は※印のものを除き、ひとまずその註記によった。

年	紀	西暦	出	拠
永和十三年十月戊子朔廿六日	三五六※	高句麗・冬壽墓誌		
泰和四年□月十六日丙午正陽	三六九	百濟・七支刀(石上神宮)		
永康七年歲次□	三九六※	高句麗・金銅光背		
乙卯年	四一五	高句麗・好太王壺杆		
延壽元年太歲在卯三月□	四五一	新羅・瑞鳳塚銀合杆		
庚子年二月	五二〇※	百濟・武寧王陵銀釧		
丙辰年二月八日	五三六	新羅・永川菩提碑		
延嘉七年歲在己未	五三九	高句麗・金銅如来立像		
景四年在辛卯	五七一	高句麗・金銅三尊仏光背		
戊戌年四月朔十四日	五七八	新羅・鳩作碑		
辛亥年二月廿六日	五九一	新羅・南山新城碑		
甲寅年三月廿六日	五九四	高句麗(百濟)・釈迦像光背(東博)		
乙卯年	五九五	新羅・於宿墓誌		
建興五年歲在丙辰	五九六	百濟(高句麗)・金銅光背		
癸未年十一月一日	六二二	百濟・金銅三尊仏光背		
甲□年□□	六二四※	百濟・金銅釈迦坐像光背		
甲寅年正月九日	六五四	百濟・砂宅智積碑		
歲在癸酉四月十五日	六七三※	百濟・三尊千仏碑像		

戊寅年七月七日	六七八	新羅・蓮花寺四面石像
己丑年二月十五日	六八九	新羅・阿弥陀仏等石像
神龜二年景午三月八日	七〇六	新羅・金銅舍利方函
開元十三年乙丑三月八日	七二五	新羅・上院寺銅鐘
壬申年六月十六日	七三二※	新羅・壬申誓記石
天寶四載乙酉	七四五	新羅・無盡寺鐘

以上はひとまず雁鴨池出土木簡の推定年代以前を限って掲出したのであるが、この間の現存金石文に年紀のみえるものはほとんどこのように年紀を冒頭に記すA型で、B型も少なく、C型に至っては皆無であり、またA型はこれ以後も頻出する。そこでC型はいつごろから現われるかを同様に検討してみると、つぎのような結果となる。

年	紀	西暦	出	拠
大曆六年歲次辛亥十二月十四日	七七二	新羅・聖德大王神鐘		
維唐大中九年歲在乙亥夏首閏月日	八五五	新羅・昌林寺無垢淨塔		
時感通四年歲次癸未無射之月十日記	八六三	新羅・敏哀大王石塔		
咸通十三年歲次壬辰十一月廿五日記	八七二	新羅・皇龍寺九層木塔刹柱		
仲和三年癸卯二月修□	八八三	新羅・金銅円套		
時乾寧二年甲辰既望記	八九五	新羅・海印寺妙吉祥塔		
乾寧二年夷則建	八九五	新羅・五台山吉祥塔		
清泰四年八月十七日記	九三七	高麗・了悟和尚碑後記		
天福六年歲次辛丑十月二十七日立	九四一	高麗・鳴鳳寺慈寂禪師陵雲塔		
維顯德參季太歲丙辰正月廿五日記	九五六	高麗・興海大寺鐘		

以上一〇世紀末までに限ったが、現存資料による限り、C型の最も早いものは七七一年（新羅恵恭王七、宝亀二）の有名な新羅聖徳大王神鐘銘で、それは銘文の末尾に唐の年号を用いて「大暦六年歲次辛亥十二月十四日」と書かれている。八世紀におけるC型はこの一例だけで、以後九世紀中ごろになってようやく散見される。しかしここに掲げた期間にあっても、さきに述べたようにA型は依然として併行して多く存続し、たとえば鐘銘でも新羅禪林院鐘の「貞元廿年甲申三月廿三日」（八〇四）、新羅靑州蓮池寺鐘の「太和七年三月日」（八三三）、新羅竅興寺鐘の「大中□年丙子八月三日」（八五六）、新羅松山村大寺鐘の「天復四年甲子二月廿二日」（九〇四）などの年紀はいずれも文章の冒頭に書かれていてA型に属し、表に示すごとくようやく興海大寺鐘（九五六）に至ってC型が現われるのである。

ところでC型はいずれも唐の年号を用いており、その初見資料である聖徳大王神鐘の場合はちょうど雁鴨池木簡の年代と重複するから、当時は年紀に関してもなお干支と年号が併用されていたことは明らかである。前表によると新羅における唐年号の使用は日本における年号始用と同じく八世紀初頭にあるようであるが、日本と違って独自の年号はなく、干支を用いることが依然として行なわれていた。それと同じように年紀記載についても、C型の出現がいつまで遡るかはともかくとして、新しいC型に関わることなく依然としてA型が盛んに用いられていたといえるであろう。

そこで以上のような朝鮮三国の金石文における年紀記載の検討結果からすると、日本において年紀記載がA型の書式から始まるのは、まず朝鮮三国に溯源するところのが妥当であろう。しかしA型からC型への移行については、新羅では日本の時期、つまり八世紀初頭にまで遡りうるかは疑問で、またはば同時と仮定しても、明確な画期がないままに、その後もA型が優勢のまま依然として存続して行ったのであって、その点日本の場合とは趣きを異にする。とすると、日本におけるA型からC型への移行については朝鮮三国以外に要因を求めねばならなくなるだろう。そしてもしそうした変化が律令に基づくとするならば、それは中国の令、具体的には明確にC型を示す公式令の遺存している唐の開元令（七年令または二十五年令）である¹⁰うが、改めてこれまで検討してきたと同様な問題を中国の場合について考えてみよう。

六

中国の木簡における年紀の位置を論ずる際に注意しておかなければならないことは、中国では一つの簡だけで文章が完結し、またそれだけで機能する場合もあるが、複数の簡を編綴して冊書の形態をなすことが多く、この点が日本とは異なることである。いま居延漢簡の中から大庭脩氏に従って若干の例を挙げてみよう。¹⁰

〔元鳳三年十月戊子朔戊子、酒泉庫令安國以近次兼行大遣□官持□□錢、去□□取丞事、金城、張掖、酒泉張舍從者如律令／據勝胡、卒史廣

守事、丞步遷、謂過所県閼津、請
|| 敦煌郡、案家所占畜馬二匹、當 ||

(前漢・前七八) 居延 三〇二・一二

〔五鳳三年十月甲辰朔甲辰、居延都尉德、丞延壽敢言之三百廿一日、以令賜賢勞百六十日半日、謹移賜勞名籍

|| 甲渠候漢疆書言、候長賢日迹積
|| 一編、敢言之、 ||

(前漢・前五三) 居延 一五九・一四

〔永光二年三月壬戌朔己卯、甲渠士吏疆以私印

|| 「行候事、敢言之、候長鄭赦父望之、不幸死、癸巳」 ||

・ 「子赦寧、敢言之、

|| 令史充 ||

(前漢・前四二) 居延 二五五・三

〔陽朔元年十一月甲辰朔戊午、第廿三候長赦之敢言之、

|| 敢言之、 ||

|| 謹移錢出入簿一編、 ||

||

(前漢・前二四) 居延 二六・四

〔永始五年閏月己巳朔丙子、北鄉嗇夫忠敢言之、義成里獄徵事、當得取傳、謁移肩水金閼、居延県索閼、敢言

|| 閏月丙子、鱗得丞彭、移肩水金閼、居延県索閼如律令

|| 崔自當自言、為家私市居延、謹案自當母官
|| 之、 ||

|| 據晏、令史建 ||

(前漢・前一二) 居延 一五・一九

〔元延二年十月乙酉、居延令尚、丞忠、移過所縣道河

|| 敦煌張掖郡中、當舍傳舍從者、如律令／守令史詡、

|| 津閼、遣亭長王豐、以詔書買騎馬酒泉「居延令印

|| 佐褒、十月丁亥出 ||

(前漢・前一) 居延 一七〇・三

〔元康五年二月癸丑朔癸亥、御史大夫吉下丞相、承書從

|| 用者如詔書、 ||

|| 事下當 ||

||

〔二月丁卯、丞相相下車騎將々軍々、中二々千々石々、

|| 少史慶、令史宜王、始長、 ||

|| 郡大守、諸侯相、承書從事下當用者、如詔書、 ||

||

(前漢・前六一) 居延 一〇・三三、三〇

⑧「十一月丙戌、宣德將軍張掖大守苞、長史丞旗、告督

□視亭市里顯見處、令吏民盡知之、旁縣起察有毋四

郵掾□□謁部農都尉官□、寫移書到、扁

時言、如治所書律令

掾習、屬沈、書佐橫、實、均

(前漢・年次未詳) 居延 一六・四

⑨⑩は郡太守の下達文書、⑪は候官の、⑫は都尉の上申文書、⑬

⑭は旅行者の身分証明書、⑮は送り状、そして⑯⑰は詔書冊のあと

に編綴された詔書の伝達を命ずる文書簡のうちのはじめの二簡であ

る。これらは完形の木簡を選んだのであるが、いずれも年紀が冒頭

に現われており、いちいち例示することはできないが、この原則は

他の文書簡についても貫徹されている。またこうした傾向は居延漢

簡の前後においても変わらない。たとえば長沙馬王堆三号墓から遣

策に伴って出土した木牘には、

⑱「十二年二月乙巳朔戊辰、家丞奮、移主贅郎中、移

贅物一編、書到、先選具奏主贅君、

(前漢文帝・前一六八) 長沙

とあり、江陵鳳凰山一六八号墓から出土した竹牘にも、

⑲「十三年五月庚辰、江陵丞敢告地下丞、市陽五

夫々際自言、與大奴良等廿八人・大婢益等十八人、輶車

二乘、牛車一兩、騶馬四匹、駟馬二匹、騎馬四匹

可行、吏以從事、敢告主、

(前漢文帝・前一六七) 江陵

というように、年紀は冒頭に記されており、また年代の降った楼蘭

出土の魏・晋簡においても、

(西晋・二六九) 楼蘭 C1a

⑳「建興十八年三月十七日、粟□胡樓□×

一萬石錢二百

・功曹 主簿

(西晋・三三〇) 楼蘭 Ch八八六

というように、その書式は変わっていない。

ところでこのように年紀を冒頭に記す書式は、中国においても木

簡に限らない。たとえば同じ時期の金石文についても同様の傾向が

認められる。私たちの容易に眼にすることのできる日本にある中国

の遺物を例にとるならば、和泉黄金塚出土の魏の景初三年(二三九)

の画文帯神獸鏡の銘文には、

㉑ 景初三年、陳是作詒銘之、保子宜孫

とあり、他の魏の正始、吳の赤烏年間の鏡などについても同様であ

る。また刀劍銘では天理市東大寺山古墳出土の金象嵌鉄刀は後漢中平年間（一八四—一八九）のものであるが、その銘文も

中平□□五月丙午、造作□□、百練清□、上応星宿、□_下辟不□_祥

となっている。そのほか書道博物館に所蔵されている中国出土の買地鉛券の類も同じで、そのうち後漢の光和元年（一七八）の一例を示せば、

光和元年十二月丙午朔十五日、平陰都郷市南里曹仲成、

従同縣男子陳胡奴、買長谷亭部馬領伯北冢田六畝二千五百、并直九千錢即日畢、田東比胡奴、北比胡奴、（表）

西比胡奴、南盡松道、四比之内根生伏財物、一錢以上皆属仲成、田中有伏尸既□男當作奴女當作婢、皆當為仲成給使、時旁人賈劉皆知券約、他如天帝律令（裏）

のごとくである。したがって中国では木簡のみならず、他の金石文の類でも、年紀を記す場合には原則として文の冒頭に置いたことは明らかであり、遡って青銅器類のいわゆる金文もその例に洩れないから、おそらく中国では最初から年紀は文章の冒頭に記す慣例となっていたのであろう。

しかしいまそうしたことの詳しい詮索は直接当面の問題には関係が薄く、またいまの私の能力の限界を超えるもので、ここでは

深く立入ることをしない。それよりもそのような金石・竹木に代わって文字を記す素材となった紙の文書においてはどうかなのか、そして中国ではいつ年紀記載の位置が逆転したのかということの方が、私たち日本の木簡について当面の問題を考える者にとっては重要なのである。まず紙の文書についてであるが、さきに掲げた楼蘭出土の魏・晋簡は実は紙に書かれた文書と一緒に発掘されている。その中でよく知られているのは大谷探検隊によって発見され、現在竜谷大学図書館に所蔵されているつぎの李柏尺牘稿である。

五月七日西域長史關内侯柏頓首々々闕久不知問常懷思想不知親相念便見忘也詔家見遣來慰勞諸國此月二日來到海頭未知王問邑々天熱想王國大小平安王使招臣俱具發從北虜中與嚴參事往不知到未今遣使符太往通消息書不盡意李柏頓首々々

この文書は考証の結果、前涼王張駿の部下で、西域長史であった李柏の書状の草稿で、咸和三年（三二八）ころのものと推定されているが、この文書でも見られるごとく、月日は文の冒頭に記されている。その他ヘーデンやスタインの発掘した同じ楼蘭文書でも、「永嘉四年（西晋懷帝、三二〇）八月十九日己酉安西和戎從事軍謀史令副溥督察移——」（C20）、「三月一日楼蘭白書濟逞白違曠遂久思企委積奉十一月書具承動靜春日和適伏想御其宜」（C2）、「十月四日具書焉耆老玄頓首言——」（Ch九三〇）、「三月十五日具書頓首々々」（Ch九三二）とい

うように、いずれの書状も月日記載から始まっている。また王羲之(三〇七—六五?)の書状として伝えられるものも、たとえば四月廿三日帖は「四月廿三日羲之頓首」、姨母帖は「十一月十三日羲之頓首頓首」、初月帖は「初月十二日山陰羲之報」でそれぞれはじまるというように、やはり月日記載が冒頭にきている。このようにしてすでに紙木併用期に入っている魏・晋の時代においても、書状の場合にはなお年紀は文章の最初に記すというA型の書式がもっぱら一般的に行なわれていたらしい。

それでは中国では唐の開元公式令に規定されているようなC型書式はいつから使用されはじめたのであろうか。こうした問題に対して専門外の私にはいま直ちに的確な答えを出すことはできない。しかしたとえば同じ王羲之でもその書として拓本の伝えられる樂毅論(余清齋帖)の「永和四年十二月廿四日書付官奴」、東方朔画贊の「永和十二年五月十三日書與王敬仁」、黃帝經の「永和十二年五月廿四日五山陰縣寫」、孝女曹娥碑(筠清館法帖)の「昇平二年八月十五日記之」などでは、年紀はいずれも文章の末尾に改行して記されている。けれどもこれらについてはいずれもまず真偽の判別に問題があるようであり、また管見に入った西晋の皇帝三臨辟雍碑(咸寧四、二七八)、齊太公呂望表(太康一〇、二八九)、さらに遡って魏の薦閣内侯季直表(黃初二、二二二)、後漢の賀捷表(建安二四、二二九)などの金石文もC型の書式をもっているが、それぞれ難しい問題がある

らしい。このように中国の金石文を当面の問題に資料として用いることは容易でなく、そうした多くの金石文類を徹底的に蒐集し、慎重に検討を加えた上でないと簡単に結論を出すことはできない。ただ専門外の私が暗中摸索を試みた過程で注意をひいた事実を覚え書きの一つとして以下に記し、参考としておきたい。

私は中国の金石文類における年月日の位置を検索するために、まず代表的な王昶撰の『金石粹編』を取りあげてみた。その結果、C型を示すものは前掲の西晋太康年間の齊太公呂望表がひとり離れて早く存在するが、北魏に入ると、始平公造像記(太和二、四九八)、孫秋生等造像記(景明三、五〇二)、比邱法生造像記(景明四、五〇三)、石門銘(永平二、五〇九)、嵩頭寺碑(永平二、五〇九)、齊郡王祐造像記(熙平二、五一七)、賈思伯碑(神龜二、五一九)、趙阿欽等造像記(神龜二、五一九)、高植墓誌(神龜四)、張猛龍清頌碑(正元三、五二二)などに年紀を銘文の末尾の方に書くC型の形式が急に頻出してくる。もちろん従来のごときA型書式のものも併行して存在するが、北魏以前にみられない顕著な現象として注目される。

同じことは墓誌についても認められる。いま趙萬里撰の『漢魏南北朝墓誌集釈』を検すると、漢・魏・晋の墓誌として掲げられるものには年紀を銘文のあとに記すものはないが、北魏になるとやはり頻出してくる。いま年次を追って掲出するとつぎのごとくである。

年月日	墓誌名	年月日	墓誌名
太和三・三・三六	韓顯宗墓誌	孝昌二・四・四	高宗夫人于仙姬墓誌
景明三・六・元	穆亮墓誌	〃 二・八・六	世宗嬪李氏墓誌
〃 四・三・二	顯祖嬪侯骨氏墓誌	〃 二・二・四	公孫猗墓誌
〃 四・二・二五	張整墓誌	〃 三・二・六	董偉墓誌
正始四・三・三	奚智墓誌	〃 三・二・三	蘇屯墓誌
〃 四・三・六	元鑒墓誌	建義元・七・七	元端墓誌
永平三・正・八	王夫人寧陵公主墓誌	〃 元・七・六	元湛墓誌
〃 四・二・五	元倅墓誌	〃 元・八・二	元鑒妃吐谷渾氏墓誌
延昌元・八・三六	鄧乾墓誌	永安元・二・二	唐耀墓誌
〃 三・七・五	高宗嬪耿氏墓誌	〃 二・三・九	元維墓誌
〃 四・三・八	山暉墓誌	〃 二・三・九	元維墓誌
熙平元・二・二三	元廣墓誌	〃 二・二・七	邢鬱妻元純隨墓誌
正光二・三・七	大監劉華仁墓誌	〃 二・三・六	穆彥墓誌
〃 四・二・七	元敷墓誌	太昌元・七・六	元延明墓誌
〃 四・二・二	鞠彥雲墓誌	〃 元・一〇・四	于祚妻和醜仁墓誌
〃 四・二・七	奚真墓誌	永熙三・二・三	僧令法師墓誌
〃 五・閏二・三	元謐墓誌	興和三・三・四	胡伯榮玉珣銘記
〃 六・正・七	徐淵墓誌	〃 三・一〇・三	元鷲墓誌
孝昌元・九・二四	王夫人元華光墓誌	天平二・七・元	元珥墓誌

この表によると太和二十三年(四九三)の韓顯宗墓誌からC型が現われるが、それは『金石萃編』によって検した結果とほぼ一致する。『漢魏南北朝墓誌集釈』には三〇〇余の北魏の墓誌が収められており、右のC型を示すものは割強を占めることになるが、それは以後の北齊・北周・隋、あるいは齊・梁の墓誌においてC型の占める

比率に対してかなり高い数値を示している。このように『金石萃編』『漢魏南北朝墓誌集釈』の二つを選んで検索した結果、北魏においては五世紀末、孝文帝のころから金石文においてC型が多く用いられているという事実が明らかになった。しかしC型はそれ以前から存在した可能性があるので、その事実が当面の課題に何らかの関係を有するものなのか否かはなお検討を要する。ただ北魏は従来の中国王朝とは異なる北方系民族の王朝であり、しかも均田制や三長制などの新しい政策を実施した孝文帝のときでもあるので、新しい書式が広汎に導入されたのかも知れない。そしてそうした変化が一般の文書書式にも及び、さらにそれがその後も継承されたとすれば、私たちは五世紀末を一つの年紀記載の画期とすることができるのであるが、今のところは何ともいえない。

ともかくこれまで検討してきたように、漢字を用いて文章を記すことを中国から教えられた朝鮮三国では、最初から年紀の記載はA型で、C型の影響をはじめは受けていない。したがって中国において年紀の記載が公文書をはじめとして一般的にA型からC型に移行した時期をX期とすると、まず中国から朝鮮に漢字を用いて文章を記す技術が伝えられたのはそのX期以前であり、朝鮮における木簡の始用もまたおそらくX期以前であつたろうと想定されてくる。そして日本の金石文や木簡もまたA型に始まり、はじめはC型の影響を受けていない。したがって木簡の使用がもし中国から直接伝えら

れたものであり、またその時期がA型からC型に一般的に移行したX期以後であれば、日本簡の年記記載は当然C型によったと推定されるから、X期以後中国から直接でなかったことは確実であろう。いまX期をいつと指定することは困難であるが、六世紀代は日本と中国との交渉が途絶えた時期であり、その時期中国ではすでにみたようにかなりC型が普及している。またたとえば雁鴨池出土の切り込みのある付札のうちには居延漢簡や藤原宮・平城宮の付札と酷似する圭頭のものがある。これらの点を勘案すると、木簡の使用はまず中国から朝鮮三国に伝えられ、その後日本に伝えられたものであり、朝鮮への伝来の時期は少なくとも五世紀末以前に遡るといえるのでなからうか。そしてもし朝鮮から日本への木簡の伝来が、中国から朝鮮への伝来時期からあまり隔たらなかったとすると、それは五世紀代に遡る可能性もなくはないが、これはあくまで仮定である。このようにして日本ではいつから木簡が使用され始めたかという問題については、なお多面的に慎重に検討する必要があるが、年記記載の問題を通じて一つの手懸りはうることできたと思う。そしてまた日本において年記記載の形式がA型からC型に変化したのが大宝令からであるとすると、当時新羅ではなおA型が盛行していたから、それは朝鮮からではなく、こんどは直接中国、すなわち唐から影響を受けたものと考えられる。このようにして日本簡と朝鮮簡・中国簡との関係についてもいささか新しい問題を提起することがで

きたかと思う。

以上主として藤原宮出土木簡を素材として年紀の記載形式の問題から大宝令との関係を論じ、さらに木簡の日本における始用時期や、朝鮮・中国の木簡との関係についても説き及ぶこととなったが、何分にも専門外の分野に臆面もなく踏み込むこととなり、しかも十分な史料蒐集の余裕がなく、考察も未熟で、思わぬ失考があるのでないかと怖れている。しかし木簡研究の進展のために敢えて大胆に試論を仮説として提起することとした次第であり、とくに中国におけるこうした文書形式の変遷についての示教を望んでやまない。

註

(1) こうした問題を含めて最近の木簡研究の動向については、今泉隆雄「日本木簡研究の現状と課題」(『歴史学研究』四八〇)を参照のこと。

(2) この欄の表記は以下左に掲げるような略称に従う。

- 藤原 報告 奈良県教育委員会『藤原宮』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告二五)
- 藤原 県概 奈良県教育委員会『藤原宮跡出土木簡概報』(奈良県文化財調査報告一〇)
- 藤原 概報 奈良国立文化財研究所『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報』(二一)(五)
- 藤原 史料 奈良国立文化財研究所『藤原宮木簡』一、二(奈良国立文化財研究所史料Ⅻ)
- 藤原 現説 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部「藤原宮第二九次発掘調査現地説明会資料」
- 平城 概報 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査出土木簡概報」

(一)―(十三)

平城 史料 奈良国立文化財研究所『平城宮木簡』一・二(奈良国立

文化財研究所史料V・Ⅷ)

大宰府概報 九州歴史資料館『大宰府史跡出土木簡概報』一

伊場 報告 浜松市教育委員会『伊場遺跡発掘調査報告書』一・四

弘田 概要 秋田県教育委員会弘田柵跡調査事務所『弘田柵跡発掘調

査概要』昭五一・五二

(3) このほか伊場遺跡出土木簡の中に「□年二月十六日□人□御□□□□^(久何カ)故□□」で始まるものが一点ある(伊場報告84)。またそのほか藤原宮木簡には「太寶三年」(藤原報告88)と記した削片があるほか、「和銅元年五^月□」「和銅元年九月」(ともに藤原概報五)、「和銅二年」(藤原概報9)という年月の記された断簡がある。前者は年紀の位置を判定し難いが、後者の三点は文章の末尾と判断できる。

(4) 弘田の木簡について和田萃は「辛酉年三月十日」はこの簡の作成年時を示すものでなく、また表裏を反対としている。和田萃「藤原宮跡出土の木簡―辛酉年木簡について―」(奈良国立文化財研究所『第一回木簡研究集会記録』所収)参照。

(5) 木簡の表と裏の問題についてはまだ観察も研究も進んでいないが、まず木簡の作り方に注意すべきで、とくに貢進物付札の場合は切り込の状態で参考となる。本稿では詳しく述べる余裕がないが、木簡そのものの記録をとる場合にはこうした点からの配慮が必要である。また表裏の判定には筆勢・墨色の相異が決め手となることが多い。

記録簡の場合にはちまでも年紀が先に書かれることが多いが、これは年紀を冒頭に置く記載形式の遺例と考えればよいから、行論には影響がない。

(6) 金石文では楊貴氏墓誌に「天平十一年八月十二日記歳次己卯」とあるが、この墓誌については擬刻説があり、またこの場合は銘文の最後であ

る。そのほか経典跋語のうち、神田孝平氏蔵「浄名玄論」巻八に「慶雲三年十二月八日記」とあるほか、五月一日経には「天平十二年五月一日記」とある。

(7) 大宝賦役令調皆随近条によれば、調の絹・綿・布・糸・綿などには具さに「国郡里戸主姓名年月日」を記すことになっている。しかし「藤原宮木簡一」解説にもあるように、「戸主」「戸口」という表記が現われるのはようやく和銅・養老ごろからで、それ以前は「某里人」という表現が多く用いられている。したがって貢進物付札の記載形式は直ちには大宝賦役令の規定には従わなかったのであるから、文書記載形式が大宝令の施行に即応して変化したことは重視すべきで、木簡の文書としての役割は過少に評価すべきものではなからう。

(8) 福山敏男「法隆寺金石文に関する二、三の問題」(『夢殿』一三)、田中重久「聖徳太子御聖蹟の研究」、東伏見邦英「法隆寺薬師如来像管見」(京都帝国大学文学部編『二千六百年記念史学論文集』所収)、藪田嘉一郎「法隆寺金堂薬師・釈迦像光背の銘文について」(『仏教芸術』七)など。

(9) 福山敏男「長谷寺の千仏多宝仏塔銅板」(『日本建築史研究』続編所収)。

(10) 韓国文化公報部文化管理局『雁鴨池発掘調査報告書』(木簡類の項は李基東氏の執筆)。

(11) 仁井田陞『唐令拾遺』八一―八四ページ。

(12) 中国簡の引用、およびその釈文は大庭脩『木簡』によった。

(13) 釈文は仁井田陞『中国法制史研究』土地法取引法四一八ページによる。

(14) 伏見冲敬『木簡残紙集』3収載の写真による。なおChはEdouard Chavannes, Les livres chinois avant l'invention du papier, Journal Asiatique Series 10 Vol. 5^e 〇th August Conrad; Die Chinesischen

Handschriften und sonstigen Kleinfunde Suen Hedins in Lou-lan.
I vol. 6 略。

- (15) 平凡社『書道全集』第四卷中国・東晋による。
(16) 平凡社『書道全集』第三卷中国・三國、西晋、十六国による。
(17) 同く平凡社『書道全集』第四卷に収める爨宝子碑の「太享四年（四〇五）歲在乙巳四月上恂立」、楊陽神道碑の「隆安三年（三九九）歲在己亥十月十一日立」はいずれも文尾に記されている。

本稿は昭和五十四年十二月一日に行なわれた木簡学会第一回研究集会で発表したものに若干の補筆を行なったものである。

木簡研究 創刊号

創刊の辞

岸 俊男

一九七八年出土の木簡

概要 平城宮跡 藤原宮跡 紀寺跡 長岡宮・京跡 平安京西市跡 平安京左京八条三坊跡 吉田南遺跡 下郡遺跡 小判田遺跡 城山遺跡 伊場遺跡 二之宮遺跡 御子ヶ谷遺跡 平形遺跡 城輪柵遺跡 堂の前遺跡 秋田城跡 草戸千軒町遺跡 尾道市街地遺跡 長門国府周辺遺跡 三宅庵寺

一九七七年以前出土の木簡(一)

柚井遺跡 弘田柵跡 平城宮跡(第五次・第七次) 正倉院伝世の木簡

中国簡牘研究の現状

大庭 脩

東北地方出土の木簡について

平川 南

長岡京木簡と太政官厨家

今泉 隆雄

藤原宮跡出土の官奴婢関係木簡について

鬼頭 清明

記念講演(M・ローウェ)要旨

木簡第一号発見のころ(田中琢) 彙報

頒価 三〇〇〇円 一四〇〇円